

きよざわ まんし

清沢満之エッセイコンテスト

# まんしさんに、 いま、伝えたいこと 受賞作品集

## 募集要項

- |         |   |         |   |
|---------|---|---------|---|
| 1. 募集内容 | まんしさん（清沢満之）に、いま、伝えたいことをエッセイ形式で書いてください。【800字以内】<br>清沢満之については、下記専用サイトをご覧ください。<br><a href="http://www.otani.ac.jp/150">http://www.otani.ac.jp/150</a>  | 4. 応募期間 | 2014年7月14日（月）～9月3日（水）消印有効   |
| 2. 応募対象 | ①中・高校生部門<br>②一般（大学生含む）部門  | 5. 表彰   | 各部門から最優秀賞1名<br>（賞状および副賞として図書カード3万円分を贈呈）<br>各部門から優秀賞2,3名<br>（賞状および副賞として図書カード1万円分を贈呈）<br>奨励賞若干名（賞状および副賞として図書カードを贈呈）   |
| 3. 応募方法 | ①ワープロ、または手書き<br>②チラシの裏面、または大学ホームページに用紙のデータがありますので、そちらをご利用のうえ、応募作品に氏名（フリガナ）・住所（〒）・電話番号・応募部門を記載して下記に送ってください。<br>※中・高校生部門は学校名・学年も記載してください。<br><br>【郵送】〒603-8143 京都市北区小山上総町<br>大谷大学企画課「清沢満之エッセイコンテスト」係<br>【FAX】075-411-8149<br>【メール】 <a href="mailto:kikakuka@sec.otani.ac.jp">kikakuka@sec.otani.ac.jp</a> | 6. 表彰式  | 最優秀賞者は10月11日（土）に大谷大学で表彰します。<br>受賞作品は、大谷大学ホームページや各種広報誌にて公表・掲載（奨励賞は氏名のみ）します。<br>受賞の連絡は9月30日（火）までに本人に通知します。<br>なお、応募作品は返却しません。また応募作品の著作権はすべて大谷大学に帰属します。<br>※各部門の最優秀賞者には表彰式の交通費（上限2万円）を支給します。 |
| 協力・後援   | 協力：真宗大谷派（東本願寺）、真宗大谷派西方寺、清澤満之記念館   | 7. 問合せ  | 大谷大学企画課「清沢満之エッセイコンテスト」係<br>TEL.075-411-8115   |

大谷大学 高大連携推進室



【一般部門】

## 最優秀賞

たかだ まさき  
高田 正城

【自己とは何ぞや、これ人世の根本的問題なり】

わかっていたつもりだった。寺に生まれ育ち、大谷大学で真宗学を学び、関係学校では「宗教」を教えていた私だったから、である。

しかし、「その時」は否応なくやってきた。突然の父の出奔。残された負債。寺院の後継問題。これまで学んだ理屈を武器に、ゆるゆると時を稼いでいこうとしていた、二十四歳の夢は、苛烈なまでの現実の一撃に潰えた。

まさにその時、闇の底から、私の心を叱咤するように響いてくる声があった。それが冒頭の一句である。同時に大学時代の師の、「・・・この論文の続きは、きみのこれからの生き方の中で書いていきなさい・・・」という声がよみがえってきた。私の論文テーマは・・・そう『真宗の宿業観』であった。

「真実の宗教とは、『苦悩から逃れようとする心』を、押さえつけるのではなく、苦悩そのものの意義を明らかに知っていくことによって、悩みの心を自ずから解放させていく道である。それによって、引き受けることを拒んでいた現実を『だれにも代わってもらわない必要のない大切なもの』として受け取っていける自分自身が育てられていくことになる。」

読み返すと、師から頂いた示唆を焼き直しただけの幼い表現である。しかし、その時の私には、ようやく「言葉の本体」に出会えたという実感があった。(もう一度、生き直してみよう。) 自らの内から声が聞こえた。私なりの【内心の決定】ということだったろうか。【誹謗・擯斥・許多の凌辱、豈に意に介すべきものあらんや】こぶしを握りしめて屈辱に耐えるとき、苦悩の海を彷徨するとき・・・それからの数十年の様々な「出会い」の根っこにはいつも「まんしさんの生き方と言葉」があった。それは人や事象の形を借りて時には私を叱咤し、時には励まし奮い立たせる。【すべからく、自己を省察すべし。大道を知見すべし】

道がある。あなたと共に今日もあるく。





【中・高校生部門】

## 最優秀賞

大谷高等学校 第2学年  
ほりいけ もえみ  
堀池 萌水

日々、人はいろいろな壁にぶつかって生きているのだと感じる。それぞれその壁は違えど、確かにそうだろうと思う。破壊するか、乗り越えるか、迂回するべきか。はたまた別の方法でか。人が壁を克服するには、「強さ」が必要だろう。私は大谷高校という、宗教を学ぶ場で、人がぶつかる壁は、その人の何か「弱い部分」である場合があるので、と考えた。

弱い部分を克服する＝強さを身に付ける。誰しもそう考えるだろうし、私もそう思ってきた。宗教を学んで、私のある考えが変わったことを、私はいま、まんしさんに伝えたい。

それは、壁を破壊するにせよ、乗り越えるにせよ、迂回するにせよ、それと対峙せねばならない。つまり弱さと向き合う、飲み込んでみるという過程があり、それができる力こそ、真の強さだということである。

これまで弱い部分も受け入れて、自分は自分ですよと言われたら、それは壁から背を向けた、逃げだと思ってきた。宗教は弱い人間がすがりついて何とか生きていくためにあるのだと、考えたりすることもあったりしたほどだ。

でも本当はそうではない。何故なら弱さとは誰からも見られたくない、自分だって見たくない面であるから。つまりそんな部分と向き合うことこそ、真の強さであるから。壁への対処の仕方は二段階目の話で、弱さとの対峙の過程がなければどんなにうまい対処をしたつもりでも、真の強さ、生きる力は得られていないというのが今の私の考えである。

宗教を学ぶから、人は強さの意味を知る。弱いからすぐるのではなく、弱さをさらけ出すから、本当の強さを得ることができる。様々な壁を見渡して、対峙して、私は今こう考えている。





【一般部門】

## 優秀賞

いちい ふみこ  
櫟 二美子

縁あり真宗大谷派の寺に嫁ぎ二十年以上の歳月が過ぎ、体の不自由な姑が介護施設に入所して一息ついた頃、重度の五十肩にかかりました。強い痛みで眠れない日々が続きパニック障害も併発し、毎日夕方になると襲う不安感や動悸、集中力の低下で気が狂うのではないかという思いにとらわれ、焦燥感の中で健康回復のため開始した、毎朝の散歩中も過去の悲しかったことや辛かったことが思い出され、歩きながら涙がこぼれて止まらない日々が続きました。出口のないまま救いを求めるように、本を読みあさる生活の中、ふとしたきっかけで読んだ電子図書の中で、大逆事件で冤罪で死刑が執行された可能性のある明治時代の社会主義者幸徳秋水の「死刑の前」という遺書を読んだ時、その中に「清沢満之」という名前を見つけました。宗教家でない人が死刑で命を終える直前にあなたの事を思い浮かべたという事が、私の中であなたに対しての強い興味となりました。

寺に嫁ぎ真宗の教えを学ぶ機会は多々ありながら、今まで日常を漫然と生きていた私でしたが、その事がきっかけであなたの絶筆である「我が信念」を読み、その時私が受けた強い衝撃は忘れられません。そして、その瞬間が「あなた」との出会いでした。私の観念においては絶望でしかない状態の中で、「信念」の幸福を得て幸せに満ちながら、死を受け入れていくあなたに強く引かれ、その日から「絶対他力の大道」を夫と毎日のお夕事に斉唱しました。散歩の時涙がこぼれ自分の煩惱が湧いてくると、四番、五番を何遍も繰り返して復唱すると、不思議に被害者意識にいつも自分の身を置いていた私が見えて来ると同時に、大切なことは「自分がどう生きるか」であるという思いが浮かんで来て、徐々に明るい気持ちになります。

今は「信念」の幸福を得るまではまだまだ遠い道のりですが、あなたに出会い、歩みの一歩を踏み出している私があります。 合掌





【一般部門】

## 優秀賞

もちづき あせい  
望月 亜世

満之さん、近代と呼ばれた時代を経て、相も変わらず人間的希望、人間的理想主義、つまりは人間的打算、すなわち自我の延長線上のことに明け暮れ、自我との戦いに敗れながらも破れ切れない現代人の私があります。私は私でありたいと願いながら、他人と比べることで安住を求め、どうあがいても一人でありながら真に一人にすらなり切れぬ、人間の誤魔化し主義が今日もまたここにあるのです。

満之さんが命を削りながらも実験された真宗という生きた宗もまた、わかりやすさという言葉によって、いつしか人間の耳に引き寄せた耳障りのよい教えに成り下がっているようであります。さらに、そのわかりやすい言葉が、徹底的な自己との格闘を阻んでいるようです。絶対に手などつなげないあなたと私が、同じ世界に出会うことができるならば、それは有限なる自己をとことん真剣に生きたところの、ただ「有限であった」との愚の自覚にしかないのではないのでしょうか。しかし、如来に照らされて「私は私でしかなかった」という一つの世界を自覚することすら、天にのぼる向上主義に求める人間の愚かさです。頭の挙げようのない大地のみが私をして私足らしめる一つの世界でありましょう。

清沢先生、徹底的に人間を尽くした先生は、御影堂の厨子に罪悪深重煩惱熾盛の影となり座り続ける親鸞聖人と今、一つになり、私の目の前におられます。そう、親鸞聖人と一つの世界に生きた満之さん。私もあなたと宿業の大地において泣き、笑い、この身を投げ出したいと思うのです。私はあなたと一つの世界に生きたいと思います。私は私として、決してあなたにはなれぬままに…。

嗚呼、燃え盛る煩惱が次から次へと沸き起こる私をして私たらしめる如来の前にあって、それでも尚、決して頭が下がることのない私の悲しさは、「聞ここにあり」と叫ぶことしか許されないのでしょうか。

—短夜やただ風吹いて満之逝く—





【中・高校生部門】

## 優秀賞

大谷中学校 第2学年  
すぎもりともか  
杉森 友佳

“吾人の世に在るや、決して単孤独存するものにあらず、常に外他の人物と相待ちて存立す”

これはまんしさんの言葉。意味は“我々がこの世に存在するということは、決して「私だけ」で成り立つのではない。孤独を感じたとしても、一人で何かを成し遂げたと思っても、必ず支えられている”らしい。

私は、最初、その“ことば”がもつイメージが沸かなかった。しかし、ふと気が付いた。

というのは、私は学校へ行ってもどこへ行っても一人、いわゆる“ボッチ”だ。よく「ボッチってさみしいなあー」とからかわれたり、「ボッチってなんかかわいそう」と言われるが、実は案外、楽しいものである。読書にも集中できるし、のんびりとできるし、さらに人間関係のトラブルに巻き込まれにくいし、とても楽だ。

だからといって、一人で生きているわけではない。たとえば、毎日学校へ行くことができたり、遊びに行けたり……そういうことができるのは、父親が働いてくれているから。ごはんも母親が、一生懸命作ってくれているから。学校に行けば、勉強を教えてくれる先生がいてくださっている。一緒にすごすクラスメイトもいる。クラブも一緒に頑張る先輩や後輩がいてくれる。このように大勢の人々と一緒に今を生きているのだ。

しかし、ひとだけでない。一日三食のごはん、野菜や果物、魚やお肉。全て生き物の命を頂いている。呼吸ができるのも空気があるから。水があるのも、この地球に雨が降ってくれるから。

ふだん、「ボッチかも」と思いがちだった私。だが全部は目には見えないけれど、全て、どこかでこの私につながっているのだ。

一番大事なことを、忘れかけていたことを気付かせてくれる、それが“まんしさんのまほうのことば”である。





【中・高校生部門】

## 優秀賞

大谷高等学校 第1学年  
とりやま たかひろ  
鳥山 貴弘

まんしさんはふしぎな人だ。苦勞しながら学問をおさめ、そして最高の待遇で仕事を  
得たのに、わずか二年で退職してその後、清貧に生きた。すべての栄光も輝かしい名声  
も何もかも捨てて。こんなことができる人などいるだろうか？しかも僕が一番驚いたの  
は、周囲から見れば苦しみの連続のような人生であっただろうに、死を迎えた時、思い  
残すことは「何もない」と言ったことである。

なぜこんな思いに到ったのか。どうやったらそんな強い心、何ものにも負けない思い  
を得ることができるのだろうか。最初僕は、もしまんしさんが生きていたら聞いてみた  
いと思った。

しかし本を読んでいるうちに僕はまんしさんの答えがわかるような気がした。まんし  
さんはこう答えるのではないか？「宗教的信念を得た人を無碍人と称する」と。

宗教的信念を持っているからこそ、すべての苦難から開放されて思い残すことなどな  
いのだ、と。

宗教とはそれほど強い力を人間に与えるのだろうか。

そもそも宗教とはなぜあるのか。それは人間は完全な力を持たない、弱い存在だから  
だろう。だからこそ人間は人間を越えた存在をおそれ、敬い、その心が信念となり宗教  
となり人間を支えてきたのだと思う。まんしさんが「何もない」と悟りをもち後悔なく  
死んだのは、自分は宗教的信念をもって人生を全うしたという確信があったからだろう。

僕はまだとてもまんしさんのように悟ったり宗教的信念を持つことはできてはいな  
い。迷ったり悩んだり、怒ったりする、だから今まんしさんに伝えるとしたら僕はこう  
言いたい。僕はまず、信念の土台となる自分を知り自分を鍛えたい。その準備期間とし  
て僕は今頑張っていますと。





【中・高校生部門】

## 優秀賞

大谷高等学校 第2学年  
かわい はるか  
河合 晴夏

小さな頃に、私は時どき夜に「死」について考えることがありました。その「死」とは主に、嫌と思っているけど必ずいつかはやってくるのであろう家族の死、そして自分の死のことであり、考えた後、死んでしまうと二度と家族と会えなくなってしまう、という考えに辿り着き、怖く恐ろしい気持ちになりました。そして「死」とは恐ろしく、絶対に嫌だと思い、「死」を避け、家族と離れ離れにならない方法を考えてみるのですが分からず、どうすれば良いのだろうと思い、一人で悩み泣いてしまうのでした。また、こんなに恐ろしい「死」のことを二度と考えたくないと思っていました。

小学四年生の時、家族に三匹の仔猫が来ました。中でもチビという猫とは特に仲が良く、塾で帰りが遅くなってもドアの前で待っていてくれたり、家の中ではいつも私の後ろについてきたりして私はチビが大好きでした。しかし、チビは五歳の時に心臓の病気で死んでしまいました。風邪かなと思って行った動物病院で、一年間生きられるか分からない、と言われた時の気持ちを今でも忘れません。病院から帰宅し、ずっと泣いていた私に母は、動物を飼うって言うことは、ただ可愛がるだけじゃなくて、死んでしまうこともよく考えて、そのことを覚悟した上で一緒に居ることなんだ、と教えてくれました。日を重ねるにつれてチビは弱々しくなっていく、そのチビの姿を毎日見ていると「死」と向き合うのがとても辛くなっていきました。しかし、そこで私は動物を飼うということの本当の意味に気付かされました。

小さな頃に私を恐ろしい気持ちにさせ、辛い思いをさせていた「死」は今も変わらず嫌だと思いますが、嫌だからといって辛い「死」から逃げてはいけません。私が見た「死」の面もチビだったのだ。清澤満之先生の「生のみが我等にあらず、死もまた我等なり」という言葉は、そういうことなのかな、と思いました。





【中・高校生部門】

## 優秀賞

大谷高等学校 第2学年  
しもおか ねね  
下岡 寧々

清沢満之。もし、あなたが今も生きていたとしたら、今のこの世の中をどう思いますか。あなたが亡くなった一九〇三年以後、この世の中は変わりました。まず、第二次世界大戦後、私達の日本国では日本国憲法が公布され、どんな人にも教育を受ける権利が与えられるようになりました。今では、教育基本法というものが定められ、教育に関する基本的な規則まで作られるようになりました。そのこともあり、教育を学ぶ環境は今もなお変化し続けています。

ですが、私達自身はどうでしょう。あなたは生前、宗教を通して人材ではなく人間を育てるために、真宗大学をつくり初代学長を務めました。そして、あなたは開校の辞として「我々に於て最大事件なる自己の信念の確立の上に其信仰を他に伝へる」と述べました。きっと、あなたは優れた部分だけではなく、劣っている部分も含めて自分なんだと認めること。そして、自分には生かしているものがあるんだ、と気づいた時、初めて他人と痛みや喜びを共有することができる、と教えたかったのではないですか。

今となつては、これは私の想像にしかすぎません。もう、あなたにこの言葉の真意を聞くことはできないのです。ですが、あなたが残したこの言葉は、今の私達の背中を押すことでしょうか。昔と比べると確かに現代は変わりました。けれど、環境がいくら変わったとしても、私たちの心の中はつねに不安や孤独を抱えています。時には、それらに押しつぶされそうにもなります。それでも、私達は生きています。私達は私達なりに自分自身と向き合い、それを受け入れる努力をしようとしています。そして、一人一人の個性を活かしながら、今を生きています。この状況を、あなたがどう思うのかはわかりません。けれども、私達はあなたの言葉を受け継いだうえで成長を遂げようとしている。これは、ある意味あなたの目指した教育の一つではないでしょうか。



